日本文学部会

【概要】

大　村　咲　希*

第14回国際日本学コンソーシアムの第一日目（2019年12月９日）に日本文学部会が開催された。本年度の統一テーマは2014年に第一弾が行われた「グローバル化と日本学Ⅱ」である。大学院生３名の研究発表と協定大学の教員３名の講演が行われた。以下、登壇順に各発表・講演の内容と質疑応答の概要を報告する。

１．羅小如（本学大学院生）「泉鏡花『黒百合』再考」

羅氏は「黒百合」研究においてこれまで副次的人物として扱われてきた若山に焦点をあて、「黒百合」は若山の成長物語であるとの見方を提示した。また、明治32年の初出時から昭和17年の岩波全集版まで五種類の本文で語句の異動を確認し、大正14年の春陽堂全集版以降「実さん（概要執筆者注：若山を指す）を」というお雪の言葉が「内の人を、私の夫を」に変更されていることを指摘した。そして、鏡花の実生活における入籍や震災という出来事も踏まえ、お雪の心が夫・若山から離れたという諸先行研究の立場に異議を唱えたとともに、鏡花が若山の物語を重要視していることをかさねて示した。質疑応答ではあまりに唐突であることが問題とされている「黒百合」の結末についてどのように解釈するかとの質問があった。羅氏は、現段階で今回提示した見方による説明は難しいため今後の課題とすることを述べた。

２．時新昊（国立台湾大学大学院生）「日本古代における女性の恋愛観―『万葉集』の女性歌人を中心に―」

時氏は『万葉集』に収録された女性歌人の恋歌を分析した。代表的なものを挙げ、一首一首の歌意をとって『万葉集』の女性の恋歌全体に通じる恋愛への憧憬や熱情を読みとった。また、そのような積極的な恋愛観には歴史的な背景があるとして、当時の人間関係における和歌の役割の大きさや妻問い婚という結婚形式、律令の規定による女性の権利の保護を指摘した。質疑応答ではまず、妻問い婚は当時の習慣として一般化できるのかとの問いがあり、時氏からそうであるとの理解が述べられた。また、２巻129番（石川女郎）や4巻563番（坂上郎女）のような自らを老女であると表現する歌は真剣な思いを伝えるものではなく戯れではないかとの質問には、それでも老いてなお恋愛への興味があることが読みとれるとの答えがあった。他に、和歌の解釈はどこからが時氏のものであるか確認する旨の質問等が出された。

３．ヴォザーバル・マテイ（カレル大学大学院生）「『奥の細道』における歌枕の描写とその有無についての考察」

『奥の細道』では芭蕉自身の旅が芭蕉の憧れた西行などの歌人の旅と重ねあわせられるように描かれているとされる。芭蕉の旅は数々の歌枕を訪ねる旅であり、それらの歌枕のほとんどは『奥の細道』に描写されているが一部記述のない地もある。ヴォザーバル氏は記述されなかった地が歌枕

＊お茶の水女子大学大学院生

として導く情景や呼び起こす感情と実際に芭蕉がそこを訪れた際の状況とを比べて示した。その結果、一部の歌枕の記述がないのは芭蕉が『奥の細道』の当該箇所で書きたかったテーマと対立する要素を含むためであるとした。また、芭蕉は先行する名歌の生む空間と実際の自身の旅の空間とのバランスをうまくとって作中世界とすることを目標としていたと考えた。質疑応答では発表題目の「有無」という語が何を指しているのかとの質問があった。ヴォザーバル氏からは、題目は「芭蕉が実際に訪ねた歌枕の地には作中で記述が無いものがあるという事実(＝「描写とその有無」)について考察する」というテーマを示しているが、より適切な表現を探す旨が述べられた。

４．朱秋而（国立台湾大学教授）「岡本花亭と李明五―朝鮮通信使との交流をめぐって―」

朱氏は、江戸時代当時における評価は高かったものの作品の大半が散逸して後世には知られていない漢詩人である岡本花亭を紹介した。先行研究を参照して彼の人物と詩の特徴を示したうえで、改めて花亭の数作品の解釈を行った。そして、現存する作品だけでは花亭の評価を定めることは困難であるとする一方、朝鮮通信使との文化交流で通信使たちに高く評価されたことを取り上げて花亭の資質は評価すべきものであると想像される旨を述べた。質疑応答では、通信使とのやりとりにはどのような意義があったのかとの質問があった。朱氏からは花亭は通信使と対面で交流をすることはできなかったものの、漢詩や文章の応酬といった文化交流は名誉であり彼の詩名を高めたとの説明があった。

５．ヴェベル・ミハエル（カレル大学准教授）「『深い河』―遠藤周作の再発見」

ヴェベル氏は2016年に公開されたマーティン・スコセッシ監督の映画『沈黙―サイレンス―』以降遠藤周作作品が世界的に再発見・再評価されている状況を報告した。今世紀の西洋におけるキリスト教観が日本で信仰を持った遠藤の抱えた感覚と近いものであるのではないかということにも触れながら、『深い河』の主人公たちを中心に分析し、作品に表れた宗教観を示した。まとめとして、近年の遠藤周作作品を取りまく状況はこのグローバル時代に宗教によって起こっている問題を反映しているのではないかとの見解が述べられた。質疑応答ではチェコにおける遠藤周作作品の人気について質問があった。『深い河』はチェコでの出版後まもないため判断できないが、とくに『侍』などが一般にも読まれていることが伝えられた。

６．范淑文（国立台湾大学教授）「真杉静枝と温又柔の比較研究の試み―グローバル化を視座にして」

明治から戦後を生きた女性作家・真杉静枝は台湾での生活経験があり、日本人女性と台湾人の夫を描いた作品に「南方の言葉」などがある。温又柔は近年芥川賞の候補になるなど注目される女性作家で、その作品に台日両方のルーツを持つ子供たちの葛藤を描いた「真ん中の子どもたち」がある。范氏は上記の二作品から言語とアイデンティティの問題が読み取れる部分を抜き出し、それぞれの登場人物がその問題にどのように向き合っていったのか分析した。二つの作品からは言語はアイデンティティの象徴であることが読み取れ、言語についての実践は文化のグローバル化の過程を描いているものであるとした。質疑応答では他のルーツを複数持つ作家との比較研究を行う予定を問う質問等があった。范氏は質問者の指摘したカズオ・イシグロに加えてリービ英雄の名前を挙げ、複数のルーツを持つ様々な作家との対照研究の有効性を示唆した。

以上の通り、今年度の日本文学部会は上代の作家・作品から近現代の作家・作品までバラエティに富んだテーマの発表と講演が行われた。院生の

方々のご発表はそれぞれ扱う作品の分析が丁寧になされ、聞きごたえのあるものであった。先生方のご講演では作品分析に加え、今年度のテーマでもあるグローバルな視点・海外との関わりによって日本の作家・作品の新たな捉え方を提示していただいた。それぞれ様々なテーマが様々な方法で論じられ、興味関心の幅が広がる充実した部会となったことと思う。